書評

『語り物の比較研究 韓国のパンソリ・巫歌と日本の語り物』

邊恩田著

依田 千百子

本書は一九九八年同志社大学に提出した博士学位請求論文に、その後新たに発表した論文二編を加えて一部加筆補正を施したものである。日本と韓国そして中国の語り物を対象にして、「物揃え」の表現方法に視座をおき、多角度からその特質を比較考察した総頁数四二六頁から成る力作である。

本書の構成は以下のとおりである。

序言

第一篇　物揃え

第一章　物揃えと語り物

第二章　人物描写の方法

第三章　名寄せ―その豊穣なる世界

第四章　物揃えと滑稽表現

第五章　「道行」と「路程記」

第二篇　『浄瑠璃物語』と『春香伝』

第一章　『浄瑠璃物語』と『春香伝』の生成と趣向

第二章　庭園描写と四方四季―見初めの方法

第三章　『剪燈新話』と『金鰲新話』から『浄瑠璃物語』へ

第四章　『金鰲新話』と『剪燈新話句解』の成立と日本

附章　朝鮮本『金鰲新話』発掘報告の紹介と成立年代考

第三篇　昔話・巫歌・語り物

第一章　昔話「腰折れ雀」とパンソリ『興甫歌』―〝大工の家建て〟をめぐって

第二章　「家讃め」の構造―日本と韓国の巫歌の比較

第四篇　語りの形態と様式

第一章　パンソリにおける視覚化方法―〝聴く〟と〝見る〟〝二人連れ〟の語り物を巡って―

て、漁民の心が確かにとらえられている。

さて、著者に寄りすぎた解説のきらいがあるが、最後に、本書の客観的な位置づけに触れておきたい。本書が取り上げたのは、漁業の民俗の一部にすぎない。漁の方法、漁労組織、漁村の構造、魚市・魚商などといった技術、社会、経済的伝承には直接言及されていない。いうなら漁業の根幹から離れた、漁民の信仰や言葉の伝承にいくぶん偏っている。そこから真の漁労や漁民の姿がとらえられるのか、表面的な理解にすぎないのではないか、といった批判が聞こえそうである。もしそのように批判されれば、著者であっても正面切って反論することは難しいだろう。しかしそれは、漁業に限らず他分野でも同様で、いわば言語の伝承は、即物的な民俗事象とは趣きを異にしているとしか言いようがない。

本書は口承文芸に関心を寄せる著者が、言語の伝承を基軸にとらえた漁労民俗の世界である。漁民の暮らしの言葉の中から、漁民の精神性を追究したところに大きな特色がある。それは民俗プロパーから顧みられることの少ない部分であり、その独自性の価値は大きい。

（法政大学出版局二〇〇三年、本体三二〇〇円）

（はなべ・ひでお／國學院大學）

初出一覧
あとがき
索引

まず序章において一研究の視座　二「物揃え」比較研究の意義　三作品「趣向」の比較研究の意義について述べている。著者によると、多種多様な語り物の文学的側面である本文の叙述表現に注目すると、そこに共通して見出される表現方法は「物揃え」（物尽くし）であるという。この語はあまり馴染みのない語である。

日本において「物揃え」を語り物文芸全般において体系的総合的に考究されたものは見あたらず、おもに個別のジャンルでの考究が進められ、成果が挙げられてきた。志田延義の『梁塵秘抄』の「物は盡し、道行（列挙法、進行法）」という表現形式の特殊性の指摘、麻原美子の舞曲の揃え形式、荒木繁の幸若舞曲の作品「夜討會我」の「〇〇尽くし」「〇〇揃え」についての指摘、徳田和夫の『浄瑠璃十二段草子』の物揃えとその淵源としての巫女の呪文の物揃えの呪的機能についての指摘などの先行研究がある。これらの先行研究をふまえて、著者は「物揃え」が語り物文芸の本質を究明する重要なポイントであると判断し、物揃えは、〈かたり〉という言語表出にかなう方法であって、物語展開における場面や状況、人物を、生き生きと劇的に描きだす〈場面化〉〈映像化〉のすぐれた機能を持つ様式であると捉えている。そして物揃えについて、詳しく考慮しその機能を明らかにしようとしている。

パンソリというのは現在韓国に伝わっている朝鮮民族の代表的な語り物であり、十七世紀の半ば頃にほぼ現在のようなかたちが出来あがっていたろうと考えられている。パンソリとは、一人の鼓手が打つ太鼓の長短（拍手・節・リズムなどに該当）にのせて、語り手唱者（伝統社会では「広大」という）が立って、ノルムセ（身振り・所作）を演じつつ物語を唱う形態の叙述表現に注目するとき、日本の「物揃え」と同様の方法がパンソリにも見出せることは重要である。「ーチレ」「ープリ」「ー打令」「ー辞説」と呼称される表現類がそれである。このような方法は、おそらく世界の語り物にも普遍的なものであろうと推考され、本書の目的は、この「物揃え」に視座をおき、日本と韓国の語り物を中心に中国の事例にも及びつつ、広く多角度から比較考察するところにあるという。

第一篇物揃え　では、日本の語り物文芸において最も注目される表現様式である「物揃え」・「物尽くし」は、表現が多種多様にわっているものの、その形態から1同種・同類の事物、事柄をとりあげ列挙するもの、2ある事物、人物、事柄を説明し描くのに、部分に分けて説明・描写することで、その全体を描こうとするもの、3地名を列挙する道行・道行文の三つのタイプに分けることができる。そして物揃えがもっともよく活かされた典型的なもの、その形態の種々相が明確であり、したがって物揃えの本質・機能がより明らかになるところに視点を置いて、〈人物描写〉〈名寄せ〉〈道行〉の三項目を、論究すべき重要なものと判断し、これを考察要項として設定している。

続いて人物描写の方法では女性の人物描写として「浄瑠璃」と「春香」の容姿、芸能・品性・装束揃えと衣服丹粧チレ、美人揃えと金玉辞説について比較し、さらにこうした美人の形容の代表的な常套表現が中国の「長恨歌」や『水滸伝』『牡丹亭』などの中国文芸作品にその典拠が求められるという。さらに男性の人物描写、馬揃えと馬讃めへと記述は

続く。

第二章の名寄せでは、武者揃えと妓生点考で各々人名が列挙されていることに注目している。ここに挙げられた人名が史実に基づくものなのか、語り手の創作によるものなのか、語り手のダイナミックな空間がそうした物揃えにどう反映するのかなど、興味深い問題が提起されている。また物揃えにおける滑稽表現では悪人の類型、どんでん返し、転覆の手法が述べられている。この問題については語り手の手腕という見地からも見る必要がある。つまり熟練した語り手は、聴き手と語りの場を手中におさめて主導権をもって語り進めていくという語り手の実態が、種々の物揃えの事例から明らかに出来る。結局のところ語り物の成立は、語り手に委ねられているといっても過言ではなく、「語り手」の研究は、作家論としても大いに研究されるべきものであろう。加えて「笑い」が「まねび」「もどき」の系譜にかかわるものであることから、古代からの祭儀や芸能についても、その構造、原理の解明が必要であろう。

第三章「道行」と「路程記」では、日本の語り物文芸において注目すべき構造の一つである道行きまたは道行文は、地名を連ねる地名列挙という点からしても、それは「物揃え」の叙述形式に入るものである。道行は「物揃え」のなかでもとりわけ、大きく発達しすぐれて趣向化されるようになり、中世・近世の語り物文芸や芸能・演劇において独自の確固たる位置を占めている。韓国の語り物にはこの道行と類似する「路程記」なるものがある。路程記は、巫覡のかたる巫歌に発して、朝鮮王朝時代後期に大きく隆盛した語り物パンソリにおいて顕著にみられ、その読み本であるパンソリ系小説のみならず民俗芸能や、伝統演劇にも認められる注目すべき様式である。本書では『平家物語』と『太平記』の道行、『春香歌』と『興夫歌』における路程記、路程記と巫歌、『沈清歌』と『まつら長者』―死への道をとりあげて両者を比較し、その内実の一端をさぐろうとしている。道行については今後さらに多くの作品にあたってその内容や様式を分析し、それが作品中いかなる文学的機能をはたすかを考研することで、この様式の文学的意義が解き明かされるものと思われる。

物揃えの他の本書のもうひとつの目的は、作品の比較文学的研究である。特に「趣向」に着目して、異なる民族間の文学作品を比較して、その受容の様相をあきらかにしようとしている。この語もあまり馴染みがない語であるが「趣向」とは「作品が他と弁別されるような新しい構成上の特色をなすもの」であるという。本書の第二篇『浄瑠璃物語』と『春香伝』では、日本の中世から近世にかけて盛行し「浄瑠璃」という新しい語り物の名称の由来ともなった作品『浄瑠璃物語』（十二段草子）と、朝鮮王朝時代にパンソリに語られ大いに隆盛した『春香伝』という二つの恋物語をとりあげて、〈見初めと忍び入りの場面における四方四季〉の趣向という、これまで論議されなかった新たな趣向の観点から比較考察を行い、趣向の典拠を明らかにしている。日韓の語り物作品の比較研究はこれまでほとんどされておらず、まして〈趣向〉という観点からのアプローチは全く新しい試みである。

その結果〈見初めと忍び入りの四方四季〉の趣向の典拠が、中国の伝奇小説『剪燈新話』の「渭塘奇遇記」と朝鮮時代の『金鰲新話』の「李生窺墻伝」にあること、特に「李生窺墻伝」から多くの影響を受けたことを明らかにしている。このように中国・朝鮮・日本と

いう東アジアにおける文学交流の実態が考証されたこと、大きな変容の姿、すなわち和様化の様相が明らかにされたことは、日本文学の独自性を解明するという点からも意義が認められる。

さらに、十六世紀に朝鮮で板行された注解本『剪燈新話句解』や梅月堂『金鰲新話』の日本伝来と受容についても著者は新見解を提出している。両作品の研究は、日本近世において、浅井了意の『伽婢子』をはじめとする、怪異小説盛行につながる外国文学の受容の背景を解き明かす研究として重要である。

また、一九九九年に中国大連で新たに発見された、それまで幻の書といわれてきた朝鮮刊本『金鰲新話』（中国大連図書館所蔵・旧養安院蔵書）についての発見報告を最初に日本の学会に紹介したのは著者である。その間の経緯と、編輯者・尹春年と伝本成立年代に関する一文が附章として収められているが、その考証は臨場感にあふれスリリングである。

第三篇昔話・巫歌・語り物では、バンソリの作品『興夫伝』（歌）とこの類話である日本の「腰折れ雀」をとりあげて考察している。報恩のひさごから出てくる財宝列挙の物揃えに着目し、諸伝承を調査し比較考察を進め、そのなかの「大工の家建て」のモチーフを重要な趣向として新たに捉えている。またその影響関係や伝播論にも及びつつ、日本の地における受容の様相を、その基盤とあわせて考察している。この研究により語り物と昔話という異なるジャンル間に共通する素材の淵源や伝播のルート、交渉関係という面から新たな展望が開かけたといえよう。著者は日韓の語り物の作品比較は、今後さらに周辺の説話文学や昔話も視野に入れ関連づけながら、広くかつ精緻に進められていくべきであろうと指摘している。

第二章「家讃め」の構造―日本と韓国の巫歌の比較―では、語り物の淵源に位置する巫歌や周辺の口誦文芸を対象にし、特に「家讃め」という物揃えの詞章に着目して、その構造・呪的機能という側面から比較考察を進め、語り物の作者が、宗教的空間で語られた巫歌をいかに文芸的に取り込み受容しているかについて考察している。語り物の淵源をたどり、その伝承の道すじをたどる試みとなっている。

第四篇語りの形態と様式では、パフォーマンスとしての語り物の特質は文献記録などにあらわれた資料は勿論、絵画資料や、なお伝承の続く語り物の場合は実際に語られる様相に着目して、それらの特質を読みとり考研する作業が必要となってくる。その手がかりとして「〝聴く〟と〝見る〟」「二人連れの語り物」という二つの視点から、異なる民族間の語り物と対比して、〝語り〟なるものの本質にふれ、そのダイナミズムを実感するために、比較研究という視座からアプローチしている。

あとがきに於いて著者は、今後の課題として、語り物における「語り」のメカニズム、音曲と文学との関係性、語りの芸能性と語りの空間の実態、そして個々の類似する作品の発掘とそれらの比較考察などを挙げている。さらに語り物の比較研究の方法論について触れ「以上のような諸問題を広く自由な視野から具体的かつ実証的に考究し成果を積み重ねるなかで、構築されていくのではないかと考えている」と締めくくっている。

本書は日本あるいは韓国の一国の語り物研究だけでは気付かなかった独創的な新しい見解が随所に示され、それらの指摘は充分に説得力があり、かつ刺激的である。本書は日韓語り物文芸の比較研究の嚆矢として、学界に

多大な寄与をなす重要な研究書である。すでに著者自らがあとがきの今後の研究課題に挙げているが、今回おもに取り上げた『浄瑠璃物語』と『春香伝』、「腰折れ雀」と『興甫伝』以外の類似作品の比較考察、中国の語り物文学『三国志演義』『水滸伝』以外の作品を加えた日中韓の類似作品の分析が待たれる。また巫歌に興味を持つ者にとっては、韓国の叙事巫歌の成立には中国の講唱文学の影響が強く、たとえば「世経本解」は中国の『梁山泊宝巻』、「二公本解」は「目連伝」、「世民皇帝本解」は「唐太宗入冥記」が底本になっているとみられているところから、中国講唱文学における物揃え表現とその韓国巫歌への影響などについてはぜひ知りたいところである。

日本の語り物研究者の間には、異論もあろうが、著者が本書で試みた「物揃え」と「趣向」という二つの新しい視点で日韓の語り物を分析するという、これまでになかった独創的な方法は見事に成功し、われわれの語り物研究に新しい視点を与えてくれた意義は極めて大きいと評価してよいだろう。

本書の著者邊恩田氏は一九五〇年大阪市生まれ。現在関西外国語大学助教授の職にある新進気鋭の比較文学者である。邊氏は天理大学朝鮮学科修了後、韓国、梨花女子大学校国語国文学科及び大学院へ留学、特に古典小説とパンソリ、韓国漢文学、中国文学の影響・受容を通して比較文学の理論と方法、韓国説話の作品研究の方法論を学ぶも、内外の事情により大学院の研究を断念して日本に帰国。三人の子供を得た後、再び同志社大学大学院（国文学専攻）に進み、語り物研究に取り組むようになったという。こうした著者の経歴からも窺えるように、韓国古典文学、パンソリ、説話文学に造詣が深くかつ日本の中近世文学にも詳しい研究者でなければ、本書のような高質にして誠緻な日韓語り物の比較研究は出来なかったものと思われる。このことは著者の文学的資質の高さもさることながら、著者が日本と韓国の語り物文芸の双方に同程度に精通している、在日コリアンという立場であったからこそ成し遂げられた快挙であるといえるだろう。

長年韓国研究に携わってきた評者にとって、著者のような有能な在日コリアンによって日韓比較研究が飛躍的な発展を遂げることを目のあたりにした思いがする。在日の人々が歴史を通して日本文化に活力を与え、豊かにしてくれていることを決して忘れてはならない。本書がハングルでなく日本語によって書かれ、日本で出版されたことは、日本の研究者にとっては幸運であったといえるだろう。著者のさらなる研究の発展を期待したい。

ところで四〇頁と六二頁に壱岐のイチジューとあるのは、イチジョーの間違いであろう。

（翰林書房　九〇〇〇円）

（よだ・ちほこ／摂南大学）